

天下分け目の関ヶ原



山本律郎

近江平野から濃尾平野への出口、伊吹、鈴鹿の両山系の迫る地峡部の盆地を『関ヶ原』と呼称する。

中山道の旧宿駅としての交通の要衝であり古代から三大関所の一つであった『不破関』に因んで名付けられたのである。わずか三キロ四方の小盆地の関ヶ原であるが、歴史上たびたび登場する戦場であって、特に天下分け目の戦いが二度も展開された舞台となったためにその名が高い。

史上に残る一大決戦

初回は歴史を逆上る古代、皇位継承にか
らんだ戦であった『壬申の乱』。紀元672
年に大海人皇子が勝者となり天武天皇に即
位された。第二回目はそれから約一〇〇〇
年後、戦国乱世を締めくくり天下の覇権を

徳川家康がにぎった、いわゆる『関ヶ原の合
戦』である。

何れもその勝者がその後の長期政権の覇
者となった…。

遠く遡る壬申の乱も関ヶ原

大化の改新を藤原鎌足とともになしとげ
た中大兄皇子が668年、滋賀の大津宮で
即位されて第38代・天智天皇となられた。

天智天皇は皇室の権力増強につとめ大が
かりな土木工事を行ったり、朝鮮半島への
出兵などを図ったがいずれも成功せず、治
世の安泰というわけにはいかなかった。そ
のため天智天皇の行政に不安をいだいた豪
族たちは、その弟である大海人皇子が博学
多通であり文武にすぐれた皇子であったこ

とから、この皇子に心を寄せはじめてい
た。

しかし、天智天皇には大友皇子という実
子があり、この皇子も英明な人物であつた
ので皇位を大友皇子に譲りたかつたのだ
が、当時は、息子より弟に相続させる例が多
かつたので大海人皇子の手前もあつて取り
敢えずは大友皇子を太政大臣に任命したの
であつた。

とにかくこの時代の政情は内憂外患入り

河内元祿

関ヶ原合戦記

秀忠軍の遅参
榊原康政家康公に弁明

関ヶ原の戦いの前、上杉征伐に向か
う途中、一日江戸に帰りをあきら
め、中山道を通ることにした。お供
の者も江戸に帰るに決まらぬと
思ふ。と云ふが宇都宮から湯浅出陣といふこと
になつたので、大身、小身の者にかか
り、道中、費用に困つたが、よきと
思ふまで行きまゐつた。
しかし、もう、そこから先の旅費がな
く、儀礼納戸金にも余分はないので借
るといふわけにもいかなかつた。

をつけて野に放つたも同然だ』と警戒を強めた。

一方、吉野に逃れた大海人皇子も、甥にあたる弘文天皇が自分を邪魔者としていることを熟知していたので近江朝廷の行動には目を放さずに警戒を続けていた。

情報収拾活動は戦国時代に始まったことではない。近江の動向にアンテナは常に張っていたのだが、たまたま、近江で天智天皇の陵(みささぎ)を造営するためと称して人夫を集め、これらにすべて武器を与えている』という情報はいった。

大海人皇子は、近江のこの動きは自分を攻撃するための準備であると疑いをつらせ、何もせずに討たれるよりも逆に機先を制して打って出ることを決意した。時を移さず、側臣の三人の舎人(とねり)に、その出身地の美濃国に急行させて大海人の領地であった安八郡を拠点に兵をつのり合戦の準備をさせた。続いて大海人皇子は妃の野

備をさせた。続いて大海人皇子は妃の野
讚良姫をはじめ二〇人ほどの従者とともに
美濃国に向かつて宮滝を出発、夜を日につ
いで歩きつづけ伊賀の柘植(つげ)に到着し
た。

ここで、内々に急報を受けて大津京を脱
出した大海人皇子の長子・高市(たけち)皇
子や大伴一族と合流、再び美濃へと急ぐみ
ちみち、事態を知った伊賀・伊勢の豪族たち
が馳せ参じてきた。こうして糾合してきた
者たちを従えて美濃の拠点に到着、軍の編
成が整った。心ききたる配下を先行させて
挙兵への協力を呼びかけさせたことが効を
奏したのであった。

軍の編成が整うと直ちに、関ヶ原の中心
地にある小高い丘の上を本陣として戦闘態
勢をとった。

後日、この小山は、大海人皇子が布陣の
時、将兵をねぎらったために桃を配ったとい





れてもいるが、この骨肉をわけての皇位継承の古戦場には、今も怨念が引きずられ、二つの神社が存在する両地区では今でも決して“縁組”はされないと言われる。

「天智天皇中大兄皇子」と天武天皇大海人皇子は、正史の上では兄弟とされ、壬申の乱は兄弟による皇位継承の争いとされてきたが、この二人はそうではなかった。また、天智は百済系統であったのに対して天武は新羅系統。百済と新羅系の争いが背後にある……などの一説もあるようだが、古代朝鮮半島と密接につながっていた飛鳥時代前後の政情は、ロマンをも含めた大きなナゾが今も秘められているようだ」

関ヶ原で大勝をおさめた大海人皇子軍は勢いに乗じ、高市皇子を総司令官として近江へなだれこんだ。大海人軍は同土討ちを避けるため将兵はすべて上衣を赤く色付け



して怒濤の如く大津京に攻め込んだのだが、この有りさまを柿本人麿は、枯れ野を焼く火の玉のようであった」と表現している。

火の玉のような大海人軍が大津京に迫ると、近江方は巨勢氏、蘇我氏、山部氏などの兵力を持った重臣氏族が迎え撃とうとした。だが、大海人軍は瀬田橋の戦鬪で迎撃軍を撃破して対岸に押しわたると、統一を欠く近江軍は内紛も加わってサンを乱すように全軍が敗走した。

大友皇子即ち弘文天皇も敗戦の將兵にまぎれて逃走したが三井寺付近で追い詰められて自決をされた。

歴代天皇のうちでも、やはり最もあわれを留めた天皇といっても過言ではないだろう。在位わずかに八ヶ月、年二十五歳であった。

その後も山城、大和、信貴山上などで残党の掃討作戦が続けられ、結局は大海人皇子の圧勝で、「乱」は集結した。捕らえられた敵將たちは斬刑に処せられ、大海人皇子は大和に凱旋。飛鳥に宮居を定めて、673年、即位されて第四〇代天武天皇となられた。

『壬申の乱』じんしんのらん』と称されるこの戦いは、皇位をめぐる叔父と甥の二人の皇子が相争うまさに骨肉の戦いとされ、皇室としては大きな汚点となるものであるが、当時の戦の規模としても大きく、朝廷の重臣ばかりではなく地方の豪族の勢力をも二分した合戦であった。

この合戦の結果によってわが国の皇室系統は、合戦の勝利者・大海人皇子すなわち天武天皇系が連綿と続いているとされている。



戦国時代の決着付けた勝ち残り家康

さて…

『壬申の乱』から一〇〇〇年ほど年を経て
またしても同じ舞台で天下を二分される大
合戦が生じるとは…

徳川家康が天下人となった、関ヶ原の合
戦。

慶長三年（一五九八）八月、伏見城内で病
床に伏していた太閤秀吉は病状悪化で再起
不能を感じ取ったのか、徳川家康、前田利家
など五大老と五奉行を枕もとに召集して涙
ながらに愛児・秀頼の後事を託した。その二
日後に一代の英雄秀吉は没した。

秀吉の死は豊臣政権を根底から揺さぶる
ことになった。が、まだ、治世を乱すまで
は至っていない。跡目相続人の秀頼が

成人するまでは五大老の合議制によって政
治を取りまとめることにし、前田利家が太
老の筆頭として取り仕切ることにしてい
た。ところが、翌年に筆頭太老の利家が病没
したのであった。

利家の病没は五大老の足並みを乱す引き
金となり急激に不協和音が高くなった。殊
に徳川家康はそれまで心ならずも秀吉の膝
下に屈して隠忍自重していたのであったが
俄然、主権者的な態度に出はじめた。元来、
家康は豊臣家と同格であるという意識を心
底に抱いていたのである。戦国武将として
の心のマグマが一挙に噴き出してきたとも
言えそうだ。

そんな事態が生じた頃、大坂城内には秀



「この世は
中納言様か、おぼろけ
ご坊主もなまふいとは
備なごころごころ
武身は他人と申す
お出し扱きにならぬ
お父様の御でお出し扱きになり
そのついでに申すにあらぬは
もはや中納言様も
おすたりにならぬぞ！」

吉の遺言によって秀頼・淀君の母子が居住することになり、秀吉の正室、北の政所・すなわちねねは西の丸に移り住んでいた。

淀君は北近江の豪族・浅井氏の娘であった。戦国の女性(によしよう)として数奇な運命をたどった一人でもあったのだが、秀吉の側で“女権勢”の頂点に立ち、また、秀吉の死亡という、絶大な権力の喪失のなかでさらに悲運の道へと転落していくわけだが、淀君権勢の範疇にあつて、当時、その周辺は近江出身の石田三成を中心に近江国人の占める文治派の武将が側近勢力を欲しいままにしていたといつてもよからう。

そのような状況下で武断派といふべき武將、加藤清正、福島正則などの何れも尾張国人で多くを占められていた集団との対立は続いていた。

両派閥とも秀吉恩顧の家臣団ではあつた

がそれらの軋轢ははつきりとしたものであり、家康はそうした軋轢・確執を利用して豊臣つぶしを画策したことは間違いないところである。

家康はそうした虚に乗じて秀吉の正室・ねねと、それに反目する淀君を牽制し自らの術中にはめようとした。先ずは、ねねを籠絡(ろうらく)することが最も効果的な策だと考え、彼女へのアプローチに取りかかった。

ねねは、その頃、西ノ丸に淋しく暮らしていた。本丸の淀君・秀頼母子の傲慢な言動、ねねの心中には穏やかならぬ憤懣が渦巻いていたにちがいない。老いの年代を迎えひとときの寂寞を感じていたねねの心の虚に取り入るように家康は親切心をねねに向けて。ねねは家康の奸計に根ざした親切を真に受けてみずからの空虚な立場をグチるように家康に打ち明けたりした。



家康にとっては、まさに思いつつば。早速に京都三本木に新宅をかまえ移住することを勧めた。

三本木にねねが移り住むと家康は足しげく新居を訪れて何かと彼女の関心をかうことに努めた。一方では大坂城にもしばしば伺候してあくまでも自らは豊臣家に従臣しているようにカモフラージュしながら豊臣家臣の動向をひそかに観察していた。

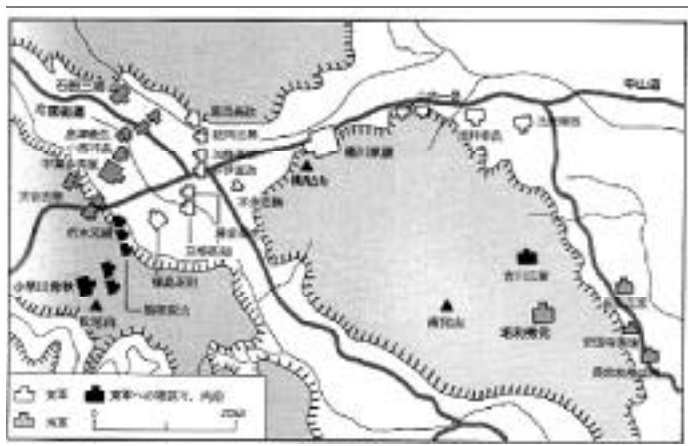
家康の脳裏に映じたのは石田三成を長として淀君を取り巻く近江派の大名が豊臣政権を牛耳っていることは自らの謀計の妨げとなる。とにかくこれらの文治派の排除が急務であると判断、特有の奸智な策謀をめぐらせてこれらの大名たちの弾圧に乗り出した。近江国人いじめとでも言おうか、家康の圧力を八々に感じた文治派大名たちは三成を煽動して家康打討の策謀に動きはじめた。

家康にとってはこれまた思いつつばではなかったろうか。次の対抗手段に着手した。

早急にねねを伏見の居宅に訪ね、いずれ近いうちに豊家存続のために奸臣どもを排除するための合戦をしなければなりません。その時は豊臣の旧臣たちを私に加勢するように北の方(ねね)から説得してください」と忠臣ぶって懇請した。

ねねは、信頼をすでに寄せていた家康の言を信じて子飼いの武将・加藤清正、福島正則や加藤嘉明などのおもだった武將たちを伏見に呼び集めて、家康から洗脳されたことをまことの豊臣のためのことと信じて、合戦が起きた場合は家康殿に味方するようにと指示。さらには、ねねの甥にあたる小早川秀秋がその頃は石田三成に従属していたのに対して、家康殿が石田軍勢と雌雄を決する合戦になった場合は、合戦の途中にお





いても家康方に寝返ってお味方をするようにと豊家にとつては恐るべき指示をしたのであった。

こうした策謀が進められている頃、たまたま会津の上杉景勝に不穏な動きがあるとの情報を受けた家康は、景勝に上洛の通告をしたが無視して応じようとしなかった。家康はその態度は豊臣政権に対する謀叛だ、ときめつけて自分が統将となつて討伐軍を差し向けるからと、豊臣家臣の大名たちに出動を要請した。

実はこれも家康の謀略であつた。

家康は自分に反抗心をいだく近江国人派の武士たちが、石田三成を擁して挙兵の機会をうかがっていることを知り、その挙兵を一刻も早く促そうという陽動作戦でもあつた。

家康は江戸城で会津遠征軍の編成をわざ



名だたるこれらの武将が率いる堂々の軍勢は八万騎。盲目の智将・大谷刑部吉隆の熟慮設定による陣形によって布陣された。

その陣形というのは、関ヶ原の地形を巧みに利用した半月形陣容であつて、東軍が関ヶ原に進撃してくれば完全に包囲して討ち取るつという戦術上最高の陣構えとされた。

東軍徳川勢も、西軍が関ヶ原に集結布陣したとの報に、家康は直ちに全軍出動を指令した。東軍勢力は七万五千人と言われたが、家康傘下の武将名を列記すると……

総大勝・徳川家康、加藤嘉明、福島正則、黒田長政、井伊直政、細川忠興、田中吉成、筒井定次、藤堂高虎、京極高知、織田有楽斎、本多忠勝、池田輝政、山内一豊など。

東軍の軍勢は数の上では西軍にややおとり、また、邀撃の布陣も鉄壁を誇るほどとい

われ西軍が勝たなければウソであつたと後世に言われるほどであつたが、勝敗の運命は人智の及ばぬところであらうか？……

東軍は、盟主・徳川家康を中心として固い団結があつたが、対して西軍の統将・石田三成の人望はうすく、統制はとれておらず、合戦の前からすでに敵将・家康と内応していた者もあつて合戦半ばで何時、寝返りされるか分からない不安があつた。八万の大軍の背後には“敗戦”の要因が潜んでいた……。

慶長五年九月十五日。夜来の激しい雨は上がったが、関ヶ原一帯は濃い霧に包まれていた。

家康はこの時点で作戦は思いど通りに進んでいることに内心ほくそ笑んでいた。

関ヶ原に軍を進めた東軍は、この盆地のほぼ中央部に位置する小高い丘、“桃配山”に本陣を置いて各隊を展開させた。

① いたたけとこ……



一日の戦いに勝つて
出立した家康が
川の水が溢れる
と聞いてたまたま
夕日に参ることにした

あって、小早川秀秋とは内応の約束があり家康方に味方するものと心待ちしていたのだが、その気配が見られないまま不安を感じ、こちらも再三にわたって寝返り決起を促す合図ののろしを上げたが反応は見られなかった。

家康もいらだって指の爪を噛みながら『あの小早川の小倅め、俺をだましおつて！』と歯ぎしりして口惜しがった。その怒りをこめて鉄砲隊に命じて小早川の陣地向けて一斉射撃を浴びせた。

小早川秀秋の陣では部下の諫めもあり、家康方に寝返ってよいものやらどうかと逡巡していたが、突然の家康軍からの一斉射撃を受けたことで悩みがふつきれ、寝返りを決意、号令を下して一挙に山上から駆け下って黒血川のほとりに陣を敷いていた西方の大谷吉継軍に攻撃をかけていった。

この様子を見ていた家康内応を心中に思

いながらも決しかねていた西軍の脇坂、小川、赤座の各隊も連鎖反応を起こしたように一斉に西軍陣地に突入をはじめた。

寝返り策謀に応じてくれるかどうか、不安を感じていた家康。石田三成にすれば混戦のなかの思わぬ裏切り……。大谷軍はそれによって全滅、隣に陣していた宇喜多軍も側面を突かれて崩れ去った。合戦に参加せずに力を温存していた寝返り軍の働きぶりに東軍は勢いを盛り返し、小西軍も本陣の石田勢も次々と雪崩のように押し寄せた家康軍に斬りたてられてついには総崩れとなった。

この合戦の総大将・石田三成はわずかの従卒と伊吹山中に逃走。ただ、島津義弘軍だけが残った。義弘は山上陣地で西軍の敗北を見届けたのであったが、部下の進言により戦場離脱をはかり、全隊員が火の玉のようになつて東軍の中央を突破、南の伊勢街



道へ遁走した。だが、東軍の激しい追撃に輩下の兵多数が討ち死に、最後まで落ちのびたのはわずかに八〇人ほどであったといふ。

死闘六時間あつけない最後

かくて午後三時。開戦火ぶたがきらられて六時間におよぶ死闘は石田三成の統率する西軍の完敗によって幕を閉じられた。三成はその後、捕らえられて京都で処刑された。

東西両軍合わせて一五万五千人の合戦は、わが国の合戦史上でも最大規模のものであったに違いない。

数の上からは優勢であった石田勢は、三成に心服して参加した武將は少なく、最初から戦う気力を持たない隊もあり内部の統制がとれていなかったこと、家康の謀略が効を奏したというものの寝返り武將が相

次いだこと、そんなことで西軍の戦闘員は二万近くが東軍に就き、実質的には三万五千人程度だったとも言われる。

この合戦を堺にして敗北した西軍諸將は没落、主家・豊臣家も急速な滅亡への道をたどりはじめる。関が原合戦の約一四年後の慶長一九年一月（一六一四）には大坂冬の陣、翌・元和元年（一六一五）四月には夏の陣がありその五月には大坂城落城、秀頼・淀君は自決して豊臣家は滅亡となる。

話は前後するが、関が原で勝利をおさめた東軍に与した諸將軍は興隆、家康は三年後には幕府を開き、徳川三〇〇年といわれた政権の基礎を固めた。

この合戦による明暗の差は極めて大きく、影響は日本全土の支配者（諸大名層）の構成に大変化をもたらせた未曾有の決戦であったからこそ、『天下分け目の関ヶ原』と言われた所以（ゆえん）である。

